

西行研究

——「たはぶれ歌」の世界——

小林 若 菜

はじめに

「たはぶれ歌」は西行が晩年に詠んだ連作歌群である。^{注1}

嵯峨にすみけるにたはぶれ歌とて人人よみけるを

一六五 うなるこがすさみにならすむぎぶえのこゑにおどろく夏のひるぶし

一六六 むかしかないりこかけとかせしことよあこめのそでにたまだすきして

一六七 たけむまをつゑにもけふはたのむかなわらはあそびをおもひいでつつ

一六八 むかしせしかくれあそびになりなばやかたすみもとによりふせりつつ

一六九 しのためにすすめゆみはるをのわらはひたひえぼしのほ

しげなるかな

一七〇 我もさぞにはのいきこのつちあそびさておひたてるみにこそありけれ

一七一 たかをでらあはれなりけるつとめかなやすらひ花とつづみうつなり

一七二 いたきかなしやうぶかぶりのちまき馬はうなるわらはのしわざとおぼえて

一七三 いりあひのおとのみならず山ではふみよむこゑもあはれなりけり

一七四 こひしきをたはぶれられしそのかみのいわけなかりしをりのこころは

一七五 いしなこのたまのおちくるほどなさにすぐる月日はかはりやはする

一七六 いまゆらもさでにかかれるいささめのいさ又しらずこひ

ざめのよや

一七七 ぬなははふいけにしづめるたていしのたてたることもな

きみぎはかな

詠い出しの、一六五番の歌の「うなる」とは、おかつぱが長くなつて肩の辺りを過ぎたくらいの髪型である。昔は7・8歳くらいの子どもがそのような髪型をしていた。「すさみに」は、心をちよつと慰めるという意味である。西行は夏の昼下がりに、子どももの鳴らす、かすかな麦笛の音を聞き、ふと昼寝から目覚める。そしてこの一首をきっかけに、子ども時代などの様々な思いが詠われていく。

「たはぶれ歌」は、西行独自の歌の世界が顕著な作品である。子どもが詠歌素材となつている歌は『万葉集』の頃から見られるが、子ども時代へとたちどころに時空を超えて回帰し、読者をも、その夢幻の世界に誘うような一つの作品世界は、その時代において西行にしか詠みえなかつた歌境であつた。このような魅力を持つ「たはぶれ歌」であるが、「たはぶれ歌」遊戯歌」という解釈ではとらえきれない歌があることや、その詠歌状況・詠歌契機に不明な点が残されてきた作品でもある。

問題となつているのは、「嵯峨にすみけるにたはぶれ歌とて人よみけるを」という詞書の理解である。まず、詠歌状況の不明

な点とは、「たはぶれ歌」が嵯峨野の中のどこで詠まれたか、また、人々とは誰なのか、まだ具体的になつていないということである。

次に、詠歌契機の不明な点とは、「たはぶれ歌」という歌の題が他にみられない為、詞書の「たはぶれ歌」の「たはぶれ」はどういう意味なのかということである。また、なぜこのような歌を西行達は詠んだのかということも明らかにされていない。今までの研究では、稲田利徳氏が「たはぶれ歌」の意味は「たはぶれあそび歌」すなわち「遊戯歌」であるとの解釈を示されて以来、^{注2}そのような理解がされてきた。西行達が、ある日ふと、今日は子ども遊びをテーマに一連の歌を創作しようではないかと詠ったというようなとらえ方である。

しかし、この解釈でも捉えきれないのが「たはぶれ歌」最後の二首である。この二首には、子どもの遊びや子どもに関連するイメージや感情は呼び起こされない。また、この二首を含む最後の三首は、歌の雰囲気もそれまでとは変わっている。その為、なぜ最後の二首が「たはぶれ歌」の中に含まれるのか、不明だとされてきた。具体的にその内の一首、一七七番を見てみよう。

一七七 ぬなははふいけにしづめるたていしのたてたることもなききみぎはかな

「ぬなは」とは、水草の蓴菜のことである。「たて石」とは、庭園や池などに立てられた石のことである。なおこの歌には掛詞が用いられている。「たてたる」の「たて」には「石を立てた」と「誓いをたてた」の意味が、「汀」には池の「水際」の意味と「身の際」、つまり老人として、死の淵にたたずんでいる意味がかさねられている。^{注3}

この歌への従来の主な解釈は次の通りである。蓴菜の繁茂した池に沈んでいる立て石に、自分自身を重ねる西行。仏道修行者としての志を「たてた」にも関わらず、今の私は何だ、と自分を省みて嘆いている……。そういった重く沈んだ西行の心を思わせる解釈がなされてきた。けれど、私はこの解釈に違和感を覚えた。

「たはぶれ歌」は晩年の西行が子ども時代を詠う中で、今の自分、そして自分の一生を見つめている歌である。しかし、私は西行が「たはぶれ歌」において、彼が自分自身を仏道修行者として捉え、その一生を振り返っていたとは感じられなかった。西行の「立てた」志は、立派な僧侶になることではなかったと思う。西行の生き方はもつと別なところにあったと私は考えるからである。

そこで一七七番歌を、当時の歌の中において考察することにした。題詠で歌を詠むことの多かった古代の人々には、「蓴菜に覆われた池」や「汀」、「沈んだ石」などに対して、今の私達にはな

いイメージや感情を持っていたらと思うからである。

そして、理解の手がかりとなる歌を、「たはぶれ歌」一七七番歌への考察を深める中で見つけることが出来た。それは、西行との晩年の交流が知られている寂蓮の歌である。

一 手がかりとなる寂蓮の歌

古池菖蒲

三六三 あれはてし池の汀もあやめ草引くにつけてぞよりはらひける

三六四 菖蒲草けふひく跡にみゆるかな立ておく石も池のころも

三六五 あやめ草けふひくあとぞ池水にたておく石も有りと

見えけり

池の立て石が水草類に覆われた状態を呼んでいる、この寂蓮の歌の詠歌内容と、「たはぶれ歌」一七七番歌との共有性は注目される。立て石は当時において特殊な歌材であった。西行が生きた時代の前後の歌集として、平安時代と鎌倉時代の歌集を『新編国歌大観』^{注4}によって調べたが、立て石が詠まれた歌は二首しか見出されなかった。さらに池の立て石となると、西行、寂蓮以外には見出すことが出来ない。寂蓮の歌が、「あれはてし池の汀」、「たておく石」といった特殊な景を詠み、寂蓮が「たはぶれ歌」の詠歌年

次とされる文治三―五年頃に嵯峨野に住んでいたことを合わせ^{注5}て、私は寂蓮のこの歌が「たはぶれ歌」の集まりで詠まれた歌だと捉えた。

二 「たはぶれ歌」と菖蒲草

寂蓮のこの歌を手がかりに、私は「たはぶれ歌」の詠歌状況・詠歌契機について次のような結論を得ることができた。

(1)「たはぶれ歌」は五月五日、端午の節句の日に、菖蒲草を引こうという集まりがあつた時に詠まれた歌であつただろう。

そしてその日には、端午の節句と共に、西行の古稀を祝して、「たはぶれ歌」を詠もうと前もって約束されており、それを持ち寄って詠み交わされたであろう。

この理由は、寂蓮の三六四番歌に「菖蒲草けふひく」とあることによる。昔は、五月五日に菖蒲を池から抜くという風習があつた。つまり、「たはぶれ歌」が詠まれたのは端午の節句の日であつたと考えられるのである。さらに大きな理由として、「あやめ」に関する歌を調べると、「たはぶれ歌」の詠歌の発想や素材に通ずるものが見られるということがある。菖蒲を引く際に歌を詠もうと前もって約束されていた為、西行は歌集をパラパラとめくり、「あ

やめ」に関する歌や、端午の節句の歌に目を通していたように思われる。「たはぶれ歌」に関する先行研究でも、前もって歌題が与えられていた可能性が指摘されており、私もその立場をとる。^{注6}

そして西行がこのような連作を創つたのは、やはりこの集まりが、特別な日であつたからだと思われる。私がそれを西行の古稀であると想定したのは、「たはぶれ歌」の詠歌年時の候補とされる文治二―三年の内に西行七十歳の時が含まれることによる。また、昔、菖蒲は長寿を願う縁起物と考えられていた。それは菖蒲が白く長い根を持ち、その根が良い香りを持つため、邪気を払ったり、若返りの効果があると信じられていたからである。

さらに、このお祝いの集まりでなぜ「たはぶれ歌」が詠まれたのかについては、当時の人生観が関係していると考えた。現代では、老人と子どもは人生の両極、離れた存在のように思われているが、昔は老人と子どもは、あの世の世界に近い神聖な存在として、わがちがたく考えられていたのである。^{注7}七十歳の長寿を祝う際に、子どもの世界が意識され、そのようなテーマの歌を詠んだということが考えられる。他の歌人に遊戯歌があまり残されていないのも、この日の主役が西行であり、加えて、その詠歌世界の魅力の深さに一同打たれ、「たはぶれ歌」は西行の連作に与えられた名前となつた…とも想像しうる。

「たはぶれ歌」の魅力の一つに、十三首に流れる調べのやわらかさがあるが、上記のように細かく詠歌状況を想定することは、その魅力を軽減させはしない。たとえ即詠ではなくとも、このような詠歌世界を創った西行の心を思うからである。

最後に、本節の結びとして、「たはぶれ歌」が菖蒲草を引く集まりで詠まれたと、確信を持たせてくれた歌を挙げる。

五月五日、をんなのもとに侍りしに、うちやすみしに、をんないり侍りしかば

○うたたねのひるねのゆめにあやめぐさむすぶとみつるうつつならなん

(兼澄集・六三)^{注8}

夢幻の世界に包まれる歌である。その詠歌世界は「たはぶれ歌」の詠い出しとつながっている。そしてこの歌が注目されるのは、昼寝の夢から覚めた時の詠であるという点である。「うたた寝は歌に多く詠まれるが、昼寝は詠まれない」^{注9}ものだった。それはおそらく『枕草子』二五段「すさまじきもの」や一〇五段「見苦しきもの」にあるように、大人がするのは相応しくないと思われていたからであろう。『大歳時記』^{注10}には「昼寝」について「覚えてしばらくは力が抜け、虚脱感があり、このむなしさ、はかなさも一つの情

趣とされるので「昼寝覚」としてよく句に詠まれている」とあるが、和歌において、昼寝をそのように詠んだ歌人はごく少なかった。^{注11}しかし西行は伝統的な歌材にのみ詠歌素材を限定せず、心の琴線に触れた歌を、自身の世界に採り入れる姿勢を持った人であった。自分でも扱いかねるような繊細かつ、激しい流れを持った心の持ち主であったから、想いを表す様々なことばを捜し求めていたのだろう。

西行は歌集を繰る中で兼澄の歌に出会った。そしてその時、子ども時代への扉が開かれたのだと思う。「たはぶれ歌」はこの歌に出会ったことで紡げたものではなかったか。源兼澄の歌が「たはぶれ歌」の詠歌発想の息吹を持つこと、そしてその出会いは西行が菖蒲に関する歌を拾い読みする中で生まれたという解釈を提示したい。

三 水草に覆われた池の歌―慈円と隆信

前節で考察した寂蓮の歌、

三六四 あやめ草けふひく跡にみゆるかな立ておく石も池のころも

は、「たはぶれ歌」一七七番歌の西行の気持ちを汲んで詠まれたかのような詠歌内容である。西行は池に沈んだ立て石を詠み、迷いに覆われている心を詠んでいるが、その西行の歌に対して寂蓮は、

水草に覆われた立て石も池の水面も、菖蒲草を引く今日だからちゃんと見えますよ。あなたの真の心はわかっています…と詠んでいる。この歌からは寂蓮の西行に対する尊敬の念が変らないものであることが伝わってくる。

西行が端午の節句にあたり、心に消えない憂き思いを、菖蒲ではなく、ぬなはで表したのはなぜだろうか。

そのことを考える上で手がかりとなるのが、例歌の少ない、「水草（みくさ・み草）」と「心（こころ）」を詠んだ歌のうち、西行との交流が知られる、慈円と藤原隆信の歌である。

○いかにせん人の心にみ草あて月は昔のひろさはのいけ

（拾玉集・二二〇三・慈円）

○ふるさとの池はみくさとどちられて心に月をやどしつる

かな

（隆信集・八九七・隆信）

私はこの二人の歌も、「たはぶれ歌」を詠んだ集まりの中で詠われたものと捉える。その理由は以下の通りである。

①慈円は晩年の西行との交流が知られ、「たはぶれ歌」を共に詠んだ仲間の一人である可能性が強いということ。また同じ時期に寂蓮との交流も知られている歌人である。さらに、慈円には「心」を「池」に同化させた歌が、他の歌人と比べてかなり多く、「たはぶ

れ歌」一七七番歌が、出家者としてまだ若い慈円にとって印象深く、自身の課題としても心に刻まれたことが考えられるということ。②「たはぶれ歌」が詠まれたのが広沢の池であったと解釈するとき、「たはぶれ歌」一七七番歌の詠歌素材「ぬなは」が詠まれた背景や、詠歌発想の源が理解できるといふ理由。

③隆信も西行との交流が知られる歌人であり、文治二年（一一八六）七月前より、西行が人々に勧めた「見浦百首」の作者に加えられていることから、晩年の西行との交流があったということ。そして、「たはぶれ歌」の詠歌素材に影響を与えていると私が考える『年中行事絵巻』（後述）の作者の一人に隆信が含まれていることから、隆信は「人人」の一人であったと考えられるという理由。

まず①の根拠について述べる。

鎌倉時代の歌集に、「池」と「心」を詠んだ歌は、『新編国歌大観』で調べたところ、全部で一八七首見られる。その中でも、一冊の私家集に十九首もその組み合わせを含む、慈円の『拾玉集』が目立つ。他の私家集では多くて六首（『隆信集』）で、ほとんどが一―三首という中で、十九首という数が多い。平安時代にもそのような私家集は見られない。ここから理由①の私見が支持されるであろう。

さらに慈円の歌が「たはぶれ歌」一七七番歌に通ずるのは、彼の広沢の池の詠み方にもある。澄んだ水をたたえた広沢の池を詠うのではなく、水草の生えた様子を詠むという稀な詠い方なのである。『新編国歌大観』で調べたところ、そのような歌は平安時代の歌集に三首、鎌倉時代の歌集に十一首しか見出されなかった。

次に②の根拠について述べる。「広沢の池」は「大沢の池」と共に知られる嵯峨野にある池である。そして広沢の池が「たはぶれ歌」一七七番歌と関連するとして注目されるのは、広沢の池が詠まれた初例が、「ぬなは」が詠まれた歌であるということである。それは次の一首である。

○ひろさはのいけのぬぬねはくりよする「」(元信集・二八)

広沢の池で詠まれた歌で、もう一首、注目される歌がある。それは次の一首である。

○古への人は汀にかけ絶えて月のみすめる広沢の池

(頼政集・二四四)

頼政の歌は、汀にたたずみ、昔へと思いをはせる姿が「たはぶれ歌」一七七番歌の西行と重なる。頼政は長治元年(一一〇四)から治承四年(一一八〇)までの、西行と同時代に生きた人であり、

西行との関係もあつた人物である。^{注12}

頼政が西行への影響関係が指摘されている源仲正^{注13}の子であること、源平の争いに大きな足跡を残していることを思うと、「たはぶれ歌」の「みぎは」という語が、広沢の池で頼政の歌が思い出される中で浮かび、同じように汀にたつ西行が、自身の心へと思いをさせたように感じられるのである。

このように、「ぬなは」「みぎは」という「たはぶれ歌」一七七番歌の歌材は、西行が広沢の池にたたずみながら胸に去来したものであつたということが、一要因としてあつたと思われる。

西行が水草の中で、なぜ「ぬなは」を詠んだのかについて明らかになってきた。さらに「ぬなは」がどのように詠まれる歌材だったのかを見ておこう。

「ぬなは」の詠まれた歌を『新編国歌大観』で調べると、平安時代の歌集に七九首、鎌倉時代の歌集に九三首、見られた。散見すると、恋の歌が多い。初例は『万葉集』にある歌である。

○あがこころゆたにたゆたにうきぬなはへにもおきにもより
かつましじ
(二三五六・作者未詳)

「ゆたにたゆたに」という柔らかで不安定な響きを持つ擬音語が、揺れる恋心の切なさを感じさせる歌である。私は「ぬなは」という歌材に、「たはぶれ歌」一七七番歌で初めて出会ったため、

ぬめぬめとした嫌なイメージを持っていたが、『大歳時記』の解説^{注14}

やこの歌に見られるように、恋心に重ねて詠われる歌材であったことを感じた。しかし「ぬなは」の恋歌はつらい恋が多い。

○池水のそこにあらではぬぬなはのくる人もなしまつ人もなし

(拾遺和歌集・一二二・明日香采女)

○いかなればしらぬにおふるうきぬなはくるしや心人しれずのみ
(後拾遺和歌集・六〇六・馬内侍)

○おく山のいはかきぬまのうきぬなはふかき恋ぢになにみだれけん
(千載和歌集・九四一・俊成)

○我が恋は人しらぬまのうきぬなはくるしやいとどみごもりにして
(林葉和歌集・六九八)

○つれもなき人の心はうきぬなはくるしきまでぞおもひみだるる
(中宮亮重家朝臣家歌合・一一七)

「ぬなは」は『歌ことば歌枕大辞典』^{注15}に「水中深く延びる」とあり、心に深く根を下ろした、つきせぬ恋心の苦しさを感じられるのである。

そうして改めて「たはぶれ歌」一七七番歌をよむ時、西行の深い苦しみも思いやられる。尊采のはう中に沈んだ石……。ここで私は西行が「ぬなは」を詠んだもう一つの理由に、西行が晩年になっても心から消すことのできなかった迷い——宗教上では煩惱——が、

恋心であつたからだと考えた。

もちろん「ぬなは」の歌にも恋心以外のことが歌われている例はある。『新編国歌大観』で調べたところ、平安時代の歌集に二十一首、鎌倉時代の歌集に五首、見られた。しかし私は「たはぶれ歌」は久保田淳氏が「甘く軽やかな旋律が次第に重くなっていく」^{注16}と言われているような、一つの調べを持つ「連作」であると思うので、一七六番歌からのつながりとして、一七七番歌をやはり恋歌であると捉える。

従来、「たはぶれ歌」一七七番歌の解釈は、池の汀にたたずむ西行が、そこに沈んだ石に自分自身をかさねているとされてきた。しかし、西行の心は考察してきたように、「ぬなは」にも表れていることを考慮すべきであろう。西行が心を投影しているのは、石一点ではなく池そのものであり、西行の心はそのとき、池になっていたのだと思われる。心の中に立てた誓いは、恋の想いに覆われて沈んでしまった……。それをぬなはの這う池に投影させて詠んだのだらう。池を覆う水草——心を覆う迷い——をあやめ草ではなく、「ぬなは」の語で詠んだのは、その方がより、その想いが恋心であることが直結して暗示されたからであり、ぬなはのゆらめきが、自分の心に即していたからだと思われる。そして、先に考察してきたように、そこが広沢の池だからであった。

最後に③の根拠を述べる。慈円の二二〇三番歌が「たはぶれ歌」の集まりの一首であると考えられる時、「心」「池」「みくさ」という共通の歌材を持ち、詠歌内容も共有される隆信の歌も、同じ集まりの際に詠まれた歌と考えられる。歌材の面に限れば、「心」「み草」「池」を読んだ歌が、『新編国歌大観』で調べると二首見られるが、詠歌内容の共有性から考えれば、隆信の歌しかない。交友関係や③の理由も併せて、私は隆信の、

○ふるさとの池はみくさとどぢられて心に月をやどしつるかな

(隆信集・八九七)

この歌も「たはぶれ歌」の集まりで詠まれた歌と考える。以上のことから、私は

(2) 詞書きにある「人人」に寂蓮、慈円、そして隆信が含まれる。そして「たはぶれ歌」は広沢の池で菖蒲草を引こうという集まりで詠まれた。

と考える。このように想定すると、「たはぶれ歌」が詠まれた時の様子が次のように浮かぶ。歌の詠まれた順序は次のようではなかっただろうか。

○ぬなははふいけにしづめるたていしのたてたることもなきみぎはかな

(西行)

○いかにせん人の心にみ草あて月は昔のひろさはのいけ

(慈円)

○ふるさとの池はみくさとどぢられて心に月をやどしつるかな

(隆信)

○菖蒲草けふひく跡にみゆるかな立ておく石も池のこころも

(寂蓮)

そしてそれぞれの気持ちは、次のようにイメージされる。

(試訳)

○ぬなは(蓴采)が生える池に沈んでしまった立石のように、出家者としてあらゆるものを捨てた身となることを誓ったにも関わらず、今なお、恋の思いの中にとらわれた我が身であることよ。

(西行)

○一体どうしたらよいのだろう。出家をしても人の心から煩惱は消えないのだ。月の名所と知られる広沢の池にも水草が生え、今宵は月も澄んでは見えない。

(慈円)

○出家後まもなく(あなた(西行)が)棲んだ、なつかしいふるさとであるこの嵯峨野の地。その広沢の池には水草が生えてしまっているが、心にはいつも変わらず、澄んだ月を宿していることよ。(あなたの出家者としての心のすばらしさはわかつているのです。)

(隆信)

○(隆信の歌を受け)そうです、あなた(西行)の心はわかつて

います。菖蒲の根が見えるのは一年に一度、端午の日だけ。そんな今日、池の底に沈んでしまった立石が見え、それをたてた人の心がわかるように、自然に遊び、歌に生きた、あなたの生涯の根底にある心、それがよくわかるのです。あなたの「人恋しさ」は煩惱とは映りません。心の真実は表面的なものを超えて伝わってきます。すばらしいことだなあ。

(寂蓮)

第一節での解釈や(試訳)に示したように、私は「たはぶれ歌」一七七番歌の「たてたることもなき」の意味を「誓いを立てた」の意味で解釈した。先行研究を参照すると、「たてたる」の意味を「取り立てたこともない」という意味にとるものも多い。そうとつても歌の意味は通じるが、やはり、「誓いをたてた」の意味であろう。寂蓮の歌の「立ておく」という言葉を考慮すれば、この解釈の方が自然である。

有吉保氏は、「たてたる」の解釈を、西行が「幼童のころ、あるところざしを立てたことがあり、老後にそれを思いおこすという心境の流れのなかで、はじめてこの一群にいれられるもの」と^{注17}されている。私は「たてたる」誓いの内容に関しては、幼童の頃というよりも西行が出家をする際に、自身が課題としたこと、誓ったことではなからうかと感じた。先に「ぬなは」について考察したこと、で、「たはぶれ歌」一七七番歌に何よりも、締めつけられるよ

うなせつなさを感じるからである。どうしようもなく、途方に暮れた気持ちである。

西行は恋心を、生涯絶つことができなかったのだ。そしていわゆる出家者として、煩惱を捨て切れない自分を責める形の歌を詠んでいるが、「たはぶれ歌」の中でこの一首をよむ時、この歌の心は「人恋しさ」という感情を西行が認めているように響いてくる。仏道修行者として内省し、さらなる求道を続け、信仰を深めようとする姿勢よりも、心の痛みに耐えながら、恋の苦しみを捨てずに、もはやそれを受け入れて生きようとしている西行の心が感じられないだろうか。こう考えてくると、西行の出家の原因は恋にあったかもしれない：そんなことをも思われた。白州正子氏は「嵯峨に西行をひきつけたのは、ただ景色が美しく静かだというだけではあるまい。そこには待賢門院が晩年を送られた法金剛院があるからだ」と私は思っている。^{注18}出家の原因についてまでは、本稿でふれる余裕がないが、私も嵯峨野を訪れ、白洲氏と同じ思いにとらわれたことを書きとめておきたい。

四 「たはぶれ歌」と後白河院の世界

第二、三節で「たはぶれ歌」の詠歌状況が大明らかになった。私はさらに「たはぶれ歌」の詠歌契機に、後白河院の世界が関連

していると考えている。

(3)「たはぶれ」の意味や、「たはぶれ歌」のテーマは『梁塵秘抄』に由来するだろう。そして必ずしも「遊戯」の意味だけに限定されない。『年中行事絵巻』にも「たはぶれ歌」の詠歌素材の源が見える。『千載和歌集』奏覧を前に、後白河院の世界が意識されていたことがあったと思われる。また「老い」が子どもと対になって共に考えられていた当時の思想から、古稀に『梁塵秘抄』のテーマにちなんだ歌をと、西行たちが課題としたのだろう。

『梁塵秘抄』、『年中行事絵巻』は、どちらも後白河院が編集を命じたものである。後白河院は西行の心の中で重要な位置を占める人物であった。その理由は、まず後白河院が西行が恋をした女性と考えられている待賢門院の皇子であるということである。第二に、後白河院と西行の歌に対する思いに共通する所があるということである。後白河院は『梁塵秘抄』のような今様を詠うことが極楽往生につながるという信仰を持っており、他方、西行は晩年に自分の良い歌を撰んで、伊勢や住吉の神の前に捧げている。西行が「たはぶれ歌」を詠んだ頃、後白河院が編纂を命じた『千載和歌集』に載せる歌が撰ばれている時期にあつて、和歌への強い思い

入れがあった晩年の西行が、後白河院の世界を意識したことが考えられる。「たはぶれ歌」の素材の中にはその反映があると考えた。

この私見(3)を加えて初めて、「たはぶれ歌」への自然な解釈が成立する。例えば一七一番歌がそうである。季節がわかるもので端午の頃に合わないのが、この「やすらひ花」の歌である。この歌材が西行に浮かんできたきっかけが、ふいに「やすらひ花」のことが思い出されたとするのもいいが、むしろ『年中行事絵巻』から素材を得た、思い出したとする方が自然である。

『年中行事絵巻』の中には「たはぶれ歌」の詠歌素材の源泉がたくさん見られる。『年中行事絵巻』^{注19}の中で、「たはぶれ歌」とかさなる素材には以下のようなものがある。

①雀を射ようと弓をいっばいに張っている男児。

(別本第三巻 第七紙)

②「やすらひ花」の記述。

(別本第三巻 第一紙)

③相姿で華やかに舞う女児。鼓を打つ子もいる。

(別本第三巻 第五紙)

④一本の杖に翁と童がつかまっている様子(別本第三巻 第八紙)

⑤お手玉をする子ども(住吉本第八巻 第一段)

⑥菖蒲兜をかぶった男児(住吉本第八巻 第一段)

⑦菖蒲の鉢巻をした子どもたち(住吉本 第十二巻)

私は中でも、①の男の子の姿は「たはぶれ歌」一六九番歌、

○ しのためてすずめゆみはるをのわらはひたひえぼしのほしげ
なるかな

の男の子の姿そのものであると感じる。梢にとまろうとやってきた雀をねらつて、空に向つて弓をいっぱいに張る男の子。「たはぶれ歌」との相違点は、この男児が額烏帽子をつけていることである。しかしその違いは問題ではない。西行はこの絵を詠っているのではなく、絵をきっかけに自身の子ども時代に帰つて、歌を詠んでいるのであるから。西行はいつも、詠歌素材を自身の心情に融和させて、心のままを詠う姿勢を持っていた。

この男児も含め、別本第三卷「安楽花」は、「たはぶれ歌」に通ずる、注目される箇所が多い。

別本第三卷の「安楽花」は藤原教長の筆で書かれているという。藤原俊成に關係のある寂蓮・隆信や、九条兼実の弟である慈円は、宮廷人との交友もあつただろうから、教長とも面識があつたかもしれない。西行も六十三歳の時、藤原教長の冥福を祈つて「一品経和歌懷紙」を成している。私はこのように、別本第三卷「安楽花」と西行たちのつながりを思い浮かべる。

右記のことは想像に頼る部分も多いが、『年中行事絵巻』が「た

はぶれ歌」を彷彿とさせるものを、豊富に持っていることは見過ごせない。

また、『梁塵秘抄』と「たはぶれ歌」との影響關係についてだが、先行研究で言及されてきたのは、

○遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子
どもの声聞けば わが身さへこそ揺るがる^{注20}れ

この一首のみである。「たはぶれ歌」の世界に後白河院の世界が関連していると考え、^{注21}『梁塵秘抄』全体にわたつて、さらなる考究の可能性があるのであろう。

結 び

最後に、本稿で示した三つの私見をもとに、「たはぶれ歌」十三首に対して浮かんだ想いを書きとめておきたい。

「たはぶれ歌」の詠い出しは、夢と現実とが入りまじった白昼夢の世界にすっぽりと包み込まれる歌である。

音という現実味を帯びたものと、眠りの世界が一首の中で融合していることが、夢幻の世界を生んでいる。そして、その詠歌発想は考察してきたように「あやめ草」に関する歌から得たものであった。

一六五番歌から一六八番歌は、菖蒲を引く集まりの為に、歌集や物語をめくる中で得た詠歌素材に、西行が自身の体験をかさねて詠まれたと思う。^{注22}

一六九番歌から一七三番歌は、同じように子どもの世界を詠っているが、後白河院の世界が基調となっている。

そして子ども時代へ想いをはせた西行は、入相の鐘の音と共にその世界への扉を静かに閉じ、今なお想いの果てぬ、昔の恋を詠い始めるのであった。私は最後の四首に漂う哀切な雰囲気は、恋の想いが詠われているところにあると解釈した。

たはぶれ歌はこんな風に紡がれたのではないだろうか。

「たはぶれ歌」は二部構成の作品である。私は右のように「たはぶれ歌」の第二部を一七四番歌からとし、その四首を恋の歌だとよんだ。そのようによむ時、最後の一首は、西行の絶ちがたい人恋しさが詠まれた歌だと感じられた。

西行は「寂しさ」を生涯かえ続けた人である。

ゆくへなく月に心のすみすみでははいかならんとすらん
怖いくらいに、純度の高い心の持ち主である西行。そんな心の中に滲む、「人恋しさ」というような人間らしい感情。それが人を惹きつけてやまない西行の魅力なのだ。

注

注1 本文は『新編国歌大観』による。

注2 「西行の『たはぶれ歌』をめぐる」(岡山大学教育学部研究集録)五〇号 二輯 昭和54・6

注3 他に次のような例歌が挙げられる。

○おひたであらましものをあやめ草かかるみぎはのうきをしりせば

(待賢門院堀河集・二〇)

○こころあさきみぎはにおふるあやめぐさひきどころなきものにぞありける

(東宮学士義忠歌合)

注4 ○石はさまたてける人の心さへかたかどありと見えもするかな

(散木奇歌集・一二七七)

○たていしのたちさだまらんとおもへどもこころにえこそまかせざりけれ

(風情集・六二三・公重)

注5 晩年の西行と寂蓮の交友関係については、山本幸二「西行の『たはぶれ歌』考」(『西行和歌の形成と受容』 明治書院 昭和62)に詳しい。

注6 ・稲田氏(注2論文)

・窪田章一郎氏(『西行の研究』 東京堂出版 昭和36)

注7 『美術の中の童子』彦根博物館編 平成12

注8 『源兼澄集全釈(私家集全釈叢書10)』春秋会 風間書房 平成3による。

注9 『源兼澄集全釈』による。

注10 『大歳時記』(集英社 平成1)

注11 「昼寝」が詠まれた数少ない例歌を挙げると以下のようなものがある。

○いもとわれやねやのかざとにひるねして日たかき夏のかけをすぐさむ

(好忠集・一七八)

○ほととぎすひるねのゆめの心ちして森の木末を今ぞすぐなる

(祿子内親王家歌合 夏・四)

注12 『聞書集』に、

としたか、よりまさ、せが院にて、老下女をおもひかくる恋と申
すことをよみけるに、まゐりあひて

○いちこめるうばめおうなのかさねもつこのてがしはにおもてならべん

(二五五)

という詠がある。

注13 注2論文。稲田氏は仲正に遊戯歌があることも指摘されている。

○うなる子が流れに浮くる笹舟の泊りは冬の氷なりけり (夫夫抄)

注14 注9に同じ。

注15 久保田淳・馬場あき子編。(角川書店 平成11)

注16 久保田淳『山家集』(古典を読む6)(岩波書店 昭和58)

注17 『西行 花の下にて春死なん』(創美社 昭和62)

注18 「重代の武士」(『西行』新潮社 昭和57)

注19 「第○巻第○段」と示したものは、福山敏男編『年中行事絵巻(新修日本

絵巻物全集24)』(角川書店 昭和53)で参照したもの。「第○巻第○紙」

と示したものは、小松茂美編『年中行事絵巻(日本の絵巻8)』(中央公

論社 昭和62)で参照したものである

注20 『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集(日本古典文学全集25)』(白田

甚五郎・新聞新一校注・訳 小学館 昭和51)による。

注21 なお慈円、寂蓮の次の歌も注目される。

慈円

○庭もせにかかる光はまたぞ見ぬあそびのこせる国はなけれど

(拾玉集・二四八九)

○わが寺の浄土まるりのあそびこそあさきものからまことなりけれ

(同・二七八七)

○あきのいねのをさまれる代のうれしきは春のあそびのまり小弓まで

(同・三七六二)

寂蓮

○うしのこにふまるな庭のかたつふりつのあるとても身をなたのみそ

(寂蓮法師家集・四〇八)

注22 「かくれあそび」は草笛との連想で『宇津保物語』「初秋」から得た歌材

であっただろう。

(こばやし わかな 二〇〇一年日本文学)